



目と身体と脳をつなぐ ビジョントレーニング

【第5回】目と手の動きをスムーズに①

一般社団法人 日本ビジョントレーニング普及協会理事 横田幹雄

■ つまみずきのポイントを見つけてあげることが先決

今回から2回に分けて、「目と手と脳(思考)をつなぐトレーニング法」について、その趣旨と具体的な方法を紹介させていただきます。まずはこのトレーニング法の考え方——意図、目的、目標などを語らせていただきます。

これまでお話ししたとおり、目から入った情報が脳で処理され、身体の各部へ指令が送られて動作となるわけですから、最初の情報がもし間違っていたら、すべてがうまくいかないことはおわかりいただけると思います。ですから、私たちはまず、その子の目がちゃんと見えているか、本当に目を使っているか、ということを観察し、それをサポートの始点とします。また、目をうまく使

え、きちんと見え、かつ情報もきちんと脳に伝わっているとしても、脳の捉え方や情報処理がうまくいかなければ、結果として身体をうまく動かすことはできません。

そしてまた、目からの情報入力も脳での情報処理も、うまく機能しているとしても、身体を使い方、コントロールがうまくいかない場合があります。私たちが観察する子どもの課題や困



©一般社団法人日本ビジョントレーニング普及協会 All Rights Reserved

■ 苦手なことをやらせると自己否定を招くことも

りごとは、こうした結果が表出している部分。そのつまみずきのポイントを見つけてあげることが先決なのです。

一般的に、保護者の皆さんの相談でよくあるのは、子どもの動作の表面的な現象だけを見て、これができない、あれが苦手と思いい、その克服のために何をしたらいいか、という質問です。

その際、私たちは、それまでに皆さんが試みてきたことを教えていただくのですが、それはやはり私たちの支援方法とは異なるアプローチである場合が多いわけです。

例えば、手先が不器用な子どもに対して、はさみで細かい形に切らせたり、字を書くことが苦手な子どもに塗り絵をさせたりするケースをよく耳にします。逆に私のほうから「細かい作業が苦手な子に苦手なことをさせて、その子はどう感じるでしょうか？」と質問すると、たい

いの方はハッとなさいます。

言うまでもなく、苦手なことに取り組ませると、子どもは苦痛を感じます。無理にやらされると、苦手なことがもつと嫌いになります。それどころか、できないことから自己否定をするようになります。つまり、動作のつまづきから、より厄介な心の問題へと発展しかねません。

手先が不器用な子には、そもそも不器用になる原因があります。その原因を解消しない限り、どんなトレーニングに取り組んでもうまくいかず、問題の糸が余計にもつれてしまいます。

私たちは、こう考えます。

手先が不器用なのは結果の部分であり、もしかすると、目から情報をしっかり取り入れていないかもしれない。あるいは目がうまく使えていない可能性もある。その結果として手先が不器用になっているかもしれないし、身体をうまく使っていないかもしれない。と。

また、次のステップである脳の情報処理において、例えば「理

解」や「解釈」という部分にその子ども特有の傾向があるため、結果として表現がうまくいっていないことも考えられます。

本当にその子ができない理由を把握するには、しっかりとコミュニケーションを取り、トレーニングをさせるに当たっては、その取り組みについてきちんと理解しているのかどうかという点に着眼しながら観察します。

その際、身体のメカニズム、コントロール方法などについて広く知識を持つこと、そして、それらを子どもたちのために活用することが求められます。



情報の処理の仕方は 育ち方でも変わってくる

「視覚認知」という言葉があるように、私たちは目からたくさん情報を取り入れ、脳でその情報を処理し、理解します。したがって、子どものつまづきは「記憶」と関係がある可能性もあります。家庭環境や家風、習慣などから生まれた独特のもの、見方や考え方、価値観やこだ

わりがあることも知っておかなければなりません。字がうまく書けない理由一つでも、怠けているから、真面目にやらないから、という物差しでは一概に測れないものなのです。

例えばその子は、これまでうまくできなかった経験がたくさんあり、そのことを親から責められ、自分でも自分を責め、できないやつだと自己否定し、さらに学校の先生や友達からも同じようなことを言われる毎日が続くと、決してポジティブな人間にはなりません。何をすることも、初めから自分には無理だと決め付けたり、失敗が怖いからやろうとしないかたりする子どもになりがちです。

私たち日本ビジョントレーニング普及協会では、ただ見えるという意味でのビジョン（視力や視覚）だけではなく、物事の捉え方や考え方、あるいは子どもたちの家庭環境や日常生活の習慣も観察した上での「認知」という観点に立ち、それぞれに合ったトレーニングや支援策が

必要であると考えています。

当スタジオに来る子どもたちのほとんどが、最初はまず「できない」「無理」「いや」から始まります。つまり、自己肯定感の低い子が多いわけです。次回に具体例を紹介させていただきます。「目と手と脳をつなぐトレーニング法」でも、うまくできずに泣き出す子がいるので、その子の特性や性格などを理解した上で取り組ませることが重要です。特に自閉症の傾向のある子どもはこだわりが強く、実現欲求も高いため、できないことにいら立ち、ときには大暴れをすることもあります。そのため関わり方をていねいに考え、繊細な支援計画を立てる必要があります。詳しくは次回説明しますが、私たちのトレーニング法は「感情」や「性格」に大きく影響を与えます。ですから、「できる」「できない」は問わず、チャレンジすることで、できるようにしていく過程が何より大切。長い目で寄り添ってあげながら支援をしていくのが理想です。